URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

- 木這子(きぼこ)とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子(こけしぼうこ) -

目 次

○連載 和算資料の電子化(2) : 塵劫記の謎..... 1	○平成15年度東北大学附属図書館職員総合研修会 16
○図書館の二つの像を考えながら..... 6	○会 議.....17
○ボン大学図書館の横顔..... 7	○人事異動.....18
○お知らせ 平成15年度東北大学附属図書館 企画展「明治・大正期の文人たち - 漱石をとりまく人々 - 」開催結果報告...13	○編集後記.....18

連載 和算資料の電子化(2): 塵劫記の謎

総務課情報企画掛長 米 澤 誠

1. 偽板に悩んだ吉田光由

塵劫記とは、江戸初期に刊行された最も有名な和算書です。著者の吉田光由は京都嵯峨の人で、京都の豪商角倉家の一族といわれています。塵劫記は、実用的な計算方法から数学上の諸問題までをはじめて網羅的にとりまとめ、図版も多用して読者が興味深く読めるように配慮した数学書です。(本誌 Vo.28, No.2「和算入門」を参照)

あまりにもその内容が独創的であったため、著作権など存在しない江戸期では、多くの偽板(海賊版)が出回りました。東北大学に在職した藤原松三郎博士の大著『明治前日

本数学史』では、寛永八年(1631年)板の跋文(あとがき)を引用しながら、次のように述べています。

「塵劫記一たび出づるや、大に世の迎へるところとなり、利に敏き書肆(書店)は、光由の承諾を得ずしてこれが偽板を出した。よって光由はその誤の多きを憂い、自ら数板を刊行して、これが偽板でない証拠として、所々に朱を以て印刷することとした」¹⁾

また吉田自身も、再三にわたり塵劫記を改訂し、寛永年間だけでも次の諸板が刊行されたといわれています。

2. 偽板でないのは？

和算資料の電子化作業を進めるにあたって、私たちは資料の書誌的事項の調査・確認作業を行ってきました。その中でも塵劫記類は多くの資料点数があり、今回の調査の中でそれを体系化することができないかと考えました。

調査を行う中で疑問に思ったのは、いったいどれが偽板（書肆の私板）でどれが吉田自身の出版なのということでした。現在流布している多くの和算解説書は、その点を明確にしていません。一方藤原博士は、この諸板のうちのどれが書肆の私板であるかを、できるだけ厳密に論じていますが、板によっては明確な結論を出していないものもあります。

ここで、従来の塵劫記成立順の通説を図示すると、次のようになります。

〔大形本〕

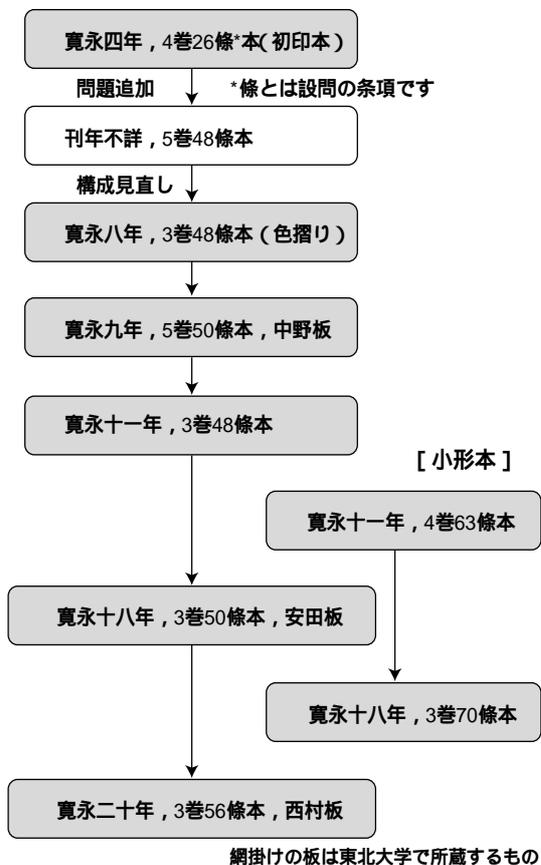


図1 塵劫記成立順の通説

通説では、 の4巻26條本に対して、まず吉田が問題の追加を行い の5巻48條本にしたとされています。さらに構成の見直しを行い、 の3巻48條本に仕上げたとされています。

藤原博士が論じているように、「序文に朱の振仮名を附せられ、光由の自筆の署名があり、確かに光由の著である」のは、 の寛永八年板の大形本です（東北大学に彩色の上・中巻あり）。また、 の大形本および、 の小形本も署名花押があるものが確認されていることから、これらは吉田自身の出版であると確定することができます。

一方、 ~ の板で、吉田の署名があるものは存在しません。また、どれひとつとして出版年の記載がないため、寛永四年に出版されたものかどうか確認できません。寛永四年とみなしているのは、序文と跋文に記されている年によっているにすぎないからです。これは、書誌学的にも間違った取扱いであり、正確には「寛永四年序」板といわなくてはならないものと考えます。

3. 毎回変わる序文の謎

さて、 , , にはそれぞれ、吉田から書名の命名と序文を求められた嵯峨天竜寺の玄光^{げんこう}の序文が記載されています。初印本とされる によると、次のような記述で序文が始まります（原文は漢文）。

「山城州葛野郡嵯峨村の人こと 吉田光由このころ或人を介して、予が柴扉を叩く、ここにおいて、眉毛あいむすぶ。袖裏より四巻の書を携えきたって、書名を序跋をもとめられる」（図2）

この「四巻」の記述は、 の刊行形態（巻数）と一致するので、何の問題もないと思われます。

しかし、5巻本である の序文では、この部分が「五巻」と直されています。さらに、真正とされる の序文では「十八巻」と直さ

れています（図3）。吉田本人が、その時々
の刊行形態にあわせて 執筆してもらった「序
文」の文章を変えるものでしょうか。

この点に関しては、藤原博士も疑念を抱い
ていないようで、「序文の『自袖裏携四巻書』
とあるのが四巻書の代りに『十八巻書』と改
めてある」と書いているにすぎません。

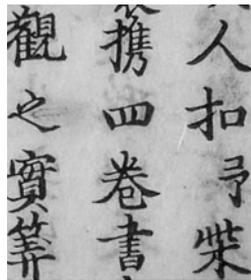


図2 4巻本の序

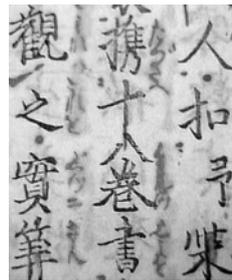


図3 3巻本の序

4. 跋文からの発見

ところが一方、真正である寛永八年版の跋
文（あとがき）には、本来十八巻本であった
ものの先頭の三巻を、上中下巻として刊行し
たことが、吉田本人の言葉として明確に述べ
られています。

「我稀に或師につきて汝思の書を受けて是を
服飾とし領袖として其の一二を得たり。其師
に聴ける所のもの書き集めて十八巻と成して
其の一二三を上中下として我に疎かなる人の
初門として伝えり」（図4）

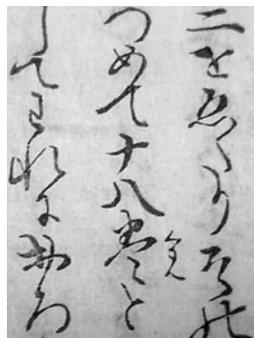


図4 3巻本の跋

この「十八巻」という記述は、序文の記述
とまったく一致するものです。これは、いつ
たいどういうことでしょうか。

この謎は、次のように考えれば、すなおに
納得できます。つまり、本来「十八巻」と記
されていた序文を、著者に断りなく出版した
者が、その装丁にあわせて「四巻」なり「五
巻」に直したのだと。つじつまが合わなくな
ることを恐れてか、やには偽板について
言及した寛文八年の跋文は含まれていませ
ん。以上の点から、は吉田自身が刊行した
ものではなく、他の何者かが刊行した偽板で
あるとの仮説がたてられます。

さらに、寛永八年の跋文の冒頭には「新編
塵劫記」という書名が記されています。これ
は、寛永八年以前に「新編」が冠されていな
い板があったことを推測させるものですが、
寛永四年板とされる4巻本の跋文にも「新編
塵劫記」と明確に記されています。このこと
からも、従来初印本とされてきたものの信憑
性が疑われると考えます。

5. 寛永塵劫記の系統分けの試み

さて 図1の が偽板ということになると、
従来の通説とは別の、塵劫記成立順の仮説が
考えられます。私たちは、ここまでの考察と
東北大学所蔵の諸版の比較調査から、現時点
で次のような系統分けの仮説を立ててみまし
た。なお、小形本については、成立順に関す
る問題は特に考えられないので、ここでは大
形本諸版の系統分けだけを試みました。

まず前述のように、寛永八年の前に、「新
編」を冠さない『原「塵劫記」』の存在が推
測されます。その後、跋文中に「新編」を関
した寛永八年の塵劫記が出版されたのもし
れません。吉田本人が出版したものと確定で
きるのは、寛永八年と寛永十一年の2点だけ
で、他の諸板はすべて偽板の可能性が高いと
いう仮説になります。

ただし唯一、寛永十八年の安田十兵衛開板
のものは、序に「十八巻」と正しく記されて
おり、目次に吉田印があることから、吉田
自身が出版に関わった可能性があります。

[真正系]

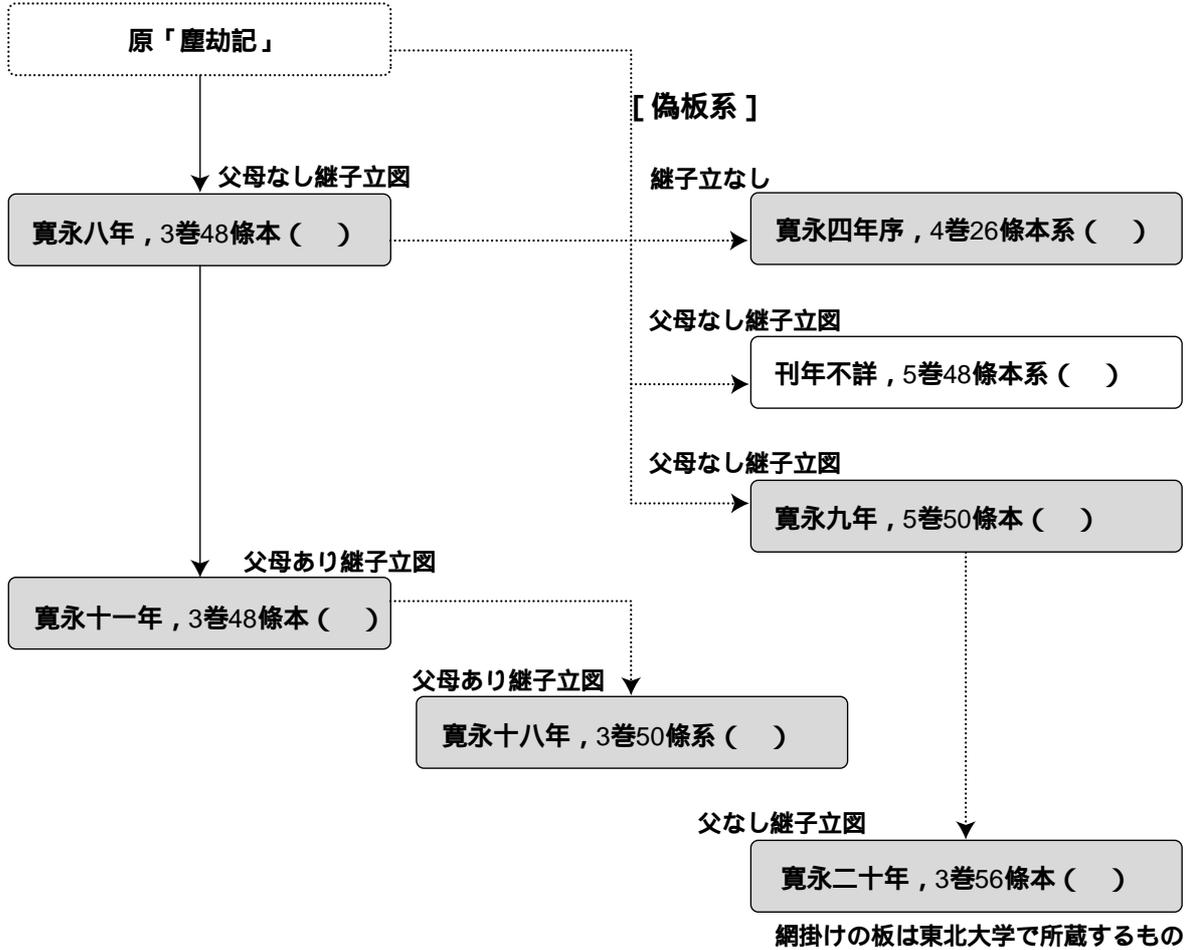


図5 寛永塵劫記の系統分けの仮説

私たちは図5のような仮説をふまえて、今回作成するマイクロフィルムへの収録順を決めました。今回の調査によって、東北大学で所蔵する塵劫記群の一つの体系化を行うことができたと考えています。

(図6)



図6 父母なし継子立図

6. 継子立に見る吉田の苦心

図5中の点線は、何らかの影響を与えたものと推定できる関係を示しています。私たちは試みとして、48条本以降の下巻に掲載される、「継子立^{ままこだて}」という問題の説明図に注目して関係を探ってみました。寛永八年板下巻の継子立には、父母が描かれていません。²⁾ この「父母なし継子立図」は、翌年の偽板である寛永九年板に引き継がれていきます。

一方、寛永十一年板では継子立図が描きかえられて、父母があるものとなっています。(図7)寛永八年板の偽板の出現を憂いて、描きかえたのかもしれませんが、この図版は、寛永十八年板に引き継がれていることがわかります。



図7 父母あり継子立図

7. 残された謎：「初印本」の由来は？

では、従来「初印本」とされてきた寛永四年序板は、どのようにして作られたものなのでしょうか。『原「塵劫記」』の偽板とも考えられますが、跋文に「新編」の文字があることから、寛永八年板を再編したものという可能性もあると考えています。

その観点で見直すと、寛永四年序の4巻26條本系は、48條本の中から実用的な生活数学だけを選んだものであるとの仮説を立てることができます。

確かに26條本系には、「ねずみ算」や「継子立」、「油はかり分け」、「入れ子算」などの、塵劫記でもっとも興味深くかつ遊戯的な数学問題が、意図的に省かれているように見えます。多くの和算解説書では、「吉田が遊戯的な数学問題を追加して48條とした」と説明していますが、逆の観点で検証してみる必要があるでしょう。

8. 研究者への期待

以上のように、図版の絵柄をたどることだけでも、諸板の関係をある程度明らかにすることができます。これから先の研究は、私たち図書館司書の手には余る問題です。ぜひ専門の研究者の方々に、他の種類の図版や問題内容そのものなどの詳細な比較や、紙質・綴じなどの物理的な面の調査により、諸板の関係を明らかにしていただきたいと思います。

私たちは、今回の電子化とウェブ公開により、多くの研究者に豊富な研究材料を提供できるものと考えています。研究者の方々がこれらの材料を十分に活用することで、新たな研究成果が現れてくることを期待しています。

注

- 1) 日本学士院編，明治前数学史 第1巻，岩波書店，1954年，p.41（以降の引用も同書による）
- 2) 日本学士院所蔵の寛永八年板によります。

(よねざわ・まこと)



図書館の二つの像を考えながら

大学院文学研究科日本古代史専攻 金 銀 貞

私が東北大学を初めて訪問したのは、2年前の2001年9月の秋のことでした。韓国にある私の出身大学（忠南大学）と東北大学が学术交流関係を結んだお陰で、6カ月間東北大学で学問の世界を経験することができました。その時は、私は研究生という身分であったため、残念ながら附属図書館の全施設を利用することはできませんでした。特に、貴重な図書が所蔵されている書庫を遠く眺めざるをえなかったことを考えると、再び東北大学を選んだ自分の選択が間違っていなかったことを切に感じます。

2年前と比べて大きく変わったことは、資料のデータベース化や電子ジャーナルの導入が急スピードで行われていることです。いわゆる、アナログからデジタルへの衣替えが始まっていると思います。その一連の動きとしては、2003年に入ってから「東北大学学術情報整備計画」の政策の下で、電子ジャーナルや二次情報データベースの全学共同購入が実現され、また「東北大学生のための情報探索の基礎知識」というマニュアルの刊行、ウェブサービスの整備、和算書の電子化作業などが注目されます。

電子情報の時代に住んでいる現代人にとっては、インターネットを通しての情報の入手が日常的な生活となっています。このような状況で、図書館がこのようなイメージを変えることは、非常に望ましいことだと思います。マウスを動かすだけで、世界の各地にある多様な資料及び情報を確認し、必要によってはダウンロードしてそのデータを自分のパソコンに保管できるようになったのは素晴らしいことだと思います。

韓国においても電子ジャーナルは大学毎に幅広く使用されています。例えば、韓国の中西部の大田広域市にある忠南大学では、購読している電子ジャーナル4,736種をキャンパス以外からでも、時間と場所に関係なくNDSLを通して利用することができます。また、図書館の学術情報を、インターネットを通して幅広く迅速に提供するため、CLINS (Chungnam

National University Library Information Network System) というサービスを提供しています。また、SCI, SSCI, A & HCIのデータベースの案内も行っていきます。このように図書館の電子情報システムの構築は、国家を問わず活発に行われていることを体験しています。

個人としてさらに希望を述べるなら、附属図書館が所蔵している書籍の価値を一層活かし、高めることを望みます。言い換えれば、様々な資料の電子化を通して、膨大な情報を国内外に公開し十分に活用すると同時に、大学以外の一般市民等が所蔵資料を直接に目で見ると、祖先たちの温もりを感じられる機会を増やしてほしいということです。

東北大学は長い歴史をもっており、約360万冊にもなる膨大な資料を所蔵しているだけに、多様で貴重な資料に接することができます。そのなかでも漱石文庫、狩野文庫、約1万点からなる和算関係資料などが有名です。東北大学だからこそ感じられる形容し難い感動、すなわち祖先たちの跡をそのまま体験できる感動は素晴らしいと思います。特に、本館の地下2階にある狩野文庫は、宝庫の中の宝庫であり、それに触れることを強く推薦したいところです。

まず、狩野文庫へ行くためには一階にあるカウンターの傍の通路を通して地下へ降りなければなりません。黴の古臭い匂いのため、瞬間的に新鮮な空気が欲しくなるかも知れませんが、これは多くの古典が存在する証ですので、嬉しい悲鳴といえるでしょう。また、狩野文庫に出入りするためには、大学院生以上である必要があるため、ほとんどの学生は手続き上の煩わしさや自分の専攻とほとんど無関係であると判断し通り過ぎがちです。

しかし、勇気を出して狩野文庫のなかに足を運ぶ者は、古典書籍が与えてくれる驚くべきプレゼントが私たちを待っていたことに気がつくと思います。

祖先たちの思いがそのまま残されている資料を一頁一頁捲る際伝わる感動を、ぜひ味わって見てください。

(キム・ウンジョン)

ボン大学図書館の横顔

- Universitäts- und Landesbibliothek (ULB) Bonn -

情報シナジーセンター学術情報研究部 小 川 知 幸

はじめに

私は、2003年7月末から8月にかけてのおよそ3週間、ドイツのボンにおいて研修の機会を得た。旧西ドイツの首都として知られているライン河畔の町ボンは人口およそ31万の小さな町である。2000年の首都移転によって政府機能の大半をベルリンへと移したが、いくつかの省庁はまだ留め置かれており、昨年ボン近郊の迎賓館でアフガニスタン暫定政権のための会議が開催されたことも記憶に新しいであろう。

連邦首都（Bundesstadt）をもじって連邦村（Bundesdorf）などと揶揄する声もあるように、実際、その中央駅は意外なほど小さい。しかし、そこからカフェの建ち並ぶ小路を抜けたところにあるボン大学は、広大な敷地に蒲公英色の威風堂々たる佇まいを見せる。（写真1）ハイネやマルクスも学んだこの大学は1818年に創設され、18世紀に建てられたケルン選帝侯の居城をそのまま用いたものである。また、案外知られていないが、ボン大学教授であったエルンスト・ツィーテルマンの遺文庫が、わが東北大学附属図書館のチー

テルマン文庫となっていることでも、本学との浅からぬ縁故がある。

「標準」としてのボン大学図書館

この小さな町ボンが西ドイツの首都となったのは初代首相アデナウアーの通勤圏だったから、という口性ない噂もあるが、その真偽はさておき、大学キャンパスのほど近く、彼にちなんだアデナウアー・アレーの通りに面してボン大学中央図書館はある。

この図書館は正式名称を Universitäts- und Landesbibliothek Bonn といい、大学図書館であるとともに、ノルトライン＝ヴェストファーレン州の州立図書館でもある。本来は大学校舎内に置かれていたが、1960年に現在の新館に移転した。一見そっけない方形の白銀色の建物は、しかし、大阪万博のドイツ・パビリオンによっても知られる著名な建築家フリッツ・ボーネマンの設計によるものである。（写真2）新しい主権国家の誕生を記念して建てられたと言え、その重要性は理解されるであろう。

ともあれ、新館はボン大学の中央図書館と



1. ボン大学の校舎



2. ボン大学中央図書館

して現在およそ240万冊の蔵書をもち、同時に市内の5つの分館・文書館と学内の158の分室を統括する役割も担っている。州立図書館としてラインラント地方で発行された図書をすべて収集する義務もある。そして近年、分館・分室のほとんどが、BoGK, BoKIS, BONNET, BoZV という蔵書検索システムによって結ばれつつある。ある意味でドイツの「標準」となる図書館なのである。

ラインを眺める閲覧室

建物正面は2階建てかと思うほど低層であるが、玄関をくぐると、かなり広いエントランスホールが現れる。(写真3) その先の右手にはインフォメーション・カウンターを取り囲むように検索端末と冊子体目録が置かれ、左手にはメインカウンター (Leihstelle) がある。2階建てかと思った建物は、そうではなく地上3階、地下3階で、地下1階は自由閲覧書庫 (Freihandmagazin)、その下は閉架書庫になっている。それに対して地上2階以上は事務室や研究個室、手写本閲覧室 (Handschriftenlesesaal) などがあり、教職員が詰めているが、大半の学生は利用する必要がない。よって学生は地上1階と地下1階を移動するだけで自由に学習を進めることができるのである。



3. エントランス・ホール

わけても素晴らしいのは、中庭を大きく囲むように作られたガラス張りの広い学生閲覧

室 (Lesesaal) であり、ここから利用者は滔々たるラインの流れや対岸の街並みを眺めながら、雑音に妨げられることなく自学自習を行うことができる。(写真4) ラインの川筋には大小の観光船や貨物船がひっきりなしに行き来する。しかしその行き交いは陽に照り映えて、ことさら静かである。実際、その静寂は非常に印象的であった。学生たちの持ち前の秩序意識に加え、ここには学習机が350脚以上あり、いずれも一定の方向を向いていること、その先に2名ほどの司書がつねに控えていることも、おそらくこうした雰囲気寄与しているのだろう。



4. 閲覧室からラインを眺める

インフォ・カウンターの使い易さ

さて、学外利用者はまずメインカウンターに行き、そこで利用証を作ることになる。ボンでの住所とパスポートの提示を求められるが、発行そのものは2、3分で済む。ドイツの大学図書館はたいてい学外者の利用を前提として運営しているので、図書館職員による説明も簡にして要を得ている。ただし、借り出した図書の持ち出しは許可されなかった。せっかくだから閲覧室でライン川を見て行け、ということなのだろう。

図書の検索は基本的に正面右手の20数台の検索端末で行う。メインカウンターとは位置的にちょうど向かい合っている。OPACにはすでに大半の図書の登録が済んでおり、未

登録のものについても今年度中に終わらせる予定（遡及入力）ということであった。一般的な書誌目録は冊子体・カード体ともにこの端末近くに備え付けられており，専門目録もインフォ・カウンター隣の専用の小部屋に用意されている。このような目録・検索手段の集中は利用者にとってたいへん利便性が高い。また，インフォには常時2名から3名の職員が詰めており，カウンターに寄るだけで誰でも，Kann ich Ihnen helfen? と笑顔で声を掛けてもらえる。説明もドイツ語はもちろんのこと，英語でも受け付けられる。場合によっては日本語も可能である。国際都市の面目躍如といえる。

緩やかな時間感覚

OPACで図書を検索すると，そこに貸出可能（Ausleihbar）かリクエスト可能（Bestellbar）かあるいは貸出不可（Nicht ausleihbar）の表示が出る。（まれに行方不明（verloren）の表示が出て驚く。）このうちリクエスト可能というのはメインカウンターの職員に出納をお願いすべき図書であり，閉架に所蔵されているか，あるいは分館・分室から取り寄せるものである。閉架の場合は2日，分館・分室の場合は1週間ほど待つことになる。われわれ日本人からすると気の遠くなるような日数である。閉架から出納する場合は早ければ1日で出てくるので，知っている学生は翌日来館するのだと，いわば裏技を教えてはもらったが……。ドイツでは，ゲッティンゲンのような最新の大学図書館を別にして，こうした時間感覚はまだまだ特別なことではない。

一方，貸出可能な表記は，利用者が地下1階の自由閲覧書庫に入って自分の手で図書を取りだしてくることを意味する。（写真5）利用者はこの書庫に入るとき，あらかじめ探した図書の排架記号（Signatur）を控えていなければその行為はまったく無意味である。

なぜなら，ここでは「超整理法」的な分類が用いられているからである。



5. 自由閲覧書庫内部

「超整理法」的な分類

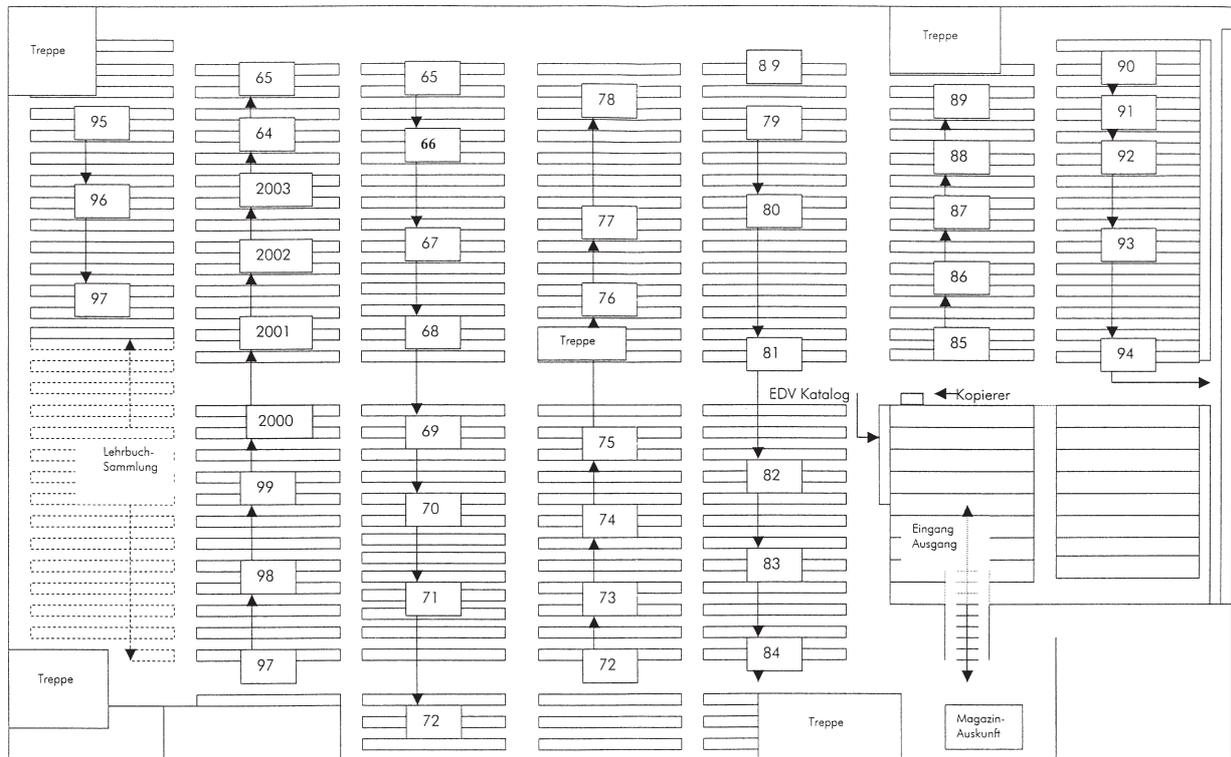
この分類法がボン大学図書館の最大の特色と言えば，そう言えなくもない。すべての図書はまず八つ折り（標準的な研究書のサイズ）か四つ折り（やや大型）かで分けられ，後は受け入れ年度と通し番号で分類される。（写真6）



6. 分類・排架された図書

たとえば，標準サイズで2003年度に389番目に登録された図書は，そのまま2003 / 389となる。よって排架された図書の分野は完全に不揃いである。排架記号を知っておくこと，つまり，事前の検索がいかにか重要かということである。以下に排架略図を掲げておく。この分類法は新館の運営とともに開始された，来る時代の新機軸であったのだろう。

Buchaufstellung im Freihandmagazin



排架略図

メリットとデメリット

このように分類を「放棄する」こと、言い換えれば図書を機械的に受け入れ順に排架することにより、分類のための人件費や、誤った分類による混乱、また特定分類の図書増加に伴う頻繁な排架位置の変更などは解消されたのであろう。それらは大きなメリットである。しかし大方は図書館にとってのメリットである。こうした排架によって利用者直接入庫によるブラウジングの効果は薄れてしまったといえる。

通常、検索者は何がどこにあったかを、書棚に一連の図書が並んでいるイメージによって記憶しているが、さまざまな図書がそこに混在していたのでは目的のものに到達することはむずかしい。分類それ自体には、何がどこにあり、何が欠けているかをも知るための重要な役割がある。「それじゃ、自分の部屋の書棚も管理できなくなっちゃうね」と私の

話を聞いた友人は漏らしていた。

ただし、この書庫も当初から利用者が直接入庫するとは思われていなかったのだろう。ためにその入り口もきわめて狭く、階段の勾配も急であった。書庫内は比較的暗く、人目に乏しい。さらに下の階 (= 閉架) に行く階段には単に鎖が渡してあるにすぎない。利用者のために開架比率を上げねばならないという要請が、意外なところで利用者 に不便を強いている。

図書を読む場所として

しかしながらボン大学図書館の名誉のために言えば、この問題は分館・分室のおかげで解消、ないしは相殺されているように思われる。というのは、およそ160箇所のにぼる分館・分室が大半の専門研究書を所蔵することによって、中央館での直接入庫の必要性が軽減されているからである。ボン大学図書館は

すでに述べたように伝統的に分散型の図書館である。分館・分室に所蔵される図書・定期刊行物の総数はおよそ379万冊（1997年の統計より筆者が試算）。所蔵数はそれぞれ数百冊から十数万冊と決して一様ではないが、専門課程の研究書をこのように特定箇所に収蔵することにより、中央館はそれらを統括し、いわば神経系を張り巡らせるかのように、その検索と入手の手段を提供する役割を担うことになったのである。そして、あの広く静かな閲覧室を提供することで、図書を読む場所という本来の意味での図書館機能を維持している。

他方、中央館は特別な資料をも収蔵しているほぼ唯一の館である。すなわち、手写本が約850点、自筆資料が約8000点、稀覯書（Rara; Rarissima）が5495点、インキュナブラが1303点ある（2003年の統計）。また、いわゆる個人文庫が図書館蔵書の一角を担い、プロイセン皇太子ゲオルクの文庫、東洋学者ハインリヒ・ゴウセン、法学者フリードリヒ・カール・フォン・サヴィニーの文庫など20点近くが収められている。このような文庫は大学創設期より今日まで持続的に受け入れられており、わが館と同じく一般図書とは別個に集中排架されている。私の目的の一つは、このサヴィニー文庫の閲覧であった。

サヴィニー文庫を求めて

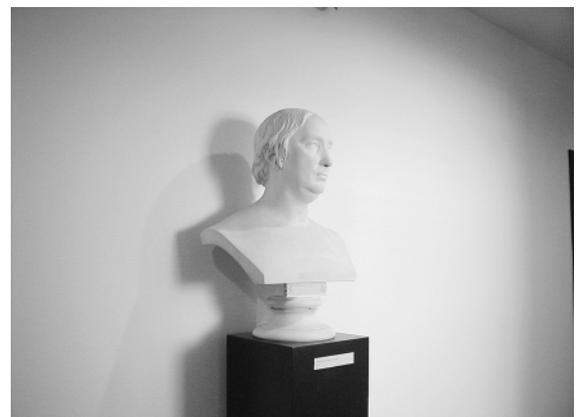
ところがこの文庫の所在がメインカウンターでは分からないというので、インフォに行くよう指示された。インフォでは司書のアンネ・バルコウさんが対応してくれた。（写真7）彼女も他の職員も、サヴィニーの文庫の一部がこの館にあるということしか分からないというので、そのような資料を一手に取り扱う3階の手写本閲覧室に行くことになった。

途中の廊下には大学図書館に貢献した数多の学者の胸像が立ち並んでおり、その中にサ



7. アンネ・バルコウさん

ヴィニーの胸像を見つけると期待で胸が膨らんだ。（写真8）しかし、閲覧室で聞けば、文庫は基本的に地下の閉架書庫にあり、一部がこの閲覧室の書庫に収められているという。しかも文庫としてまとめた目録はない。閲覧室は職員出納を原則とする。だから文庫を通覧する手段は存在しない、云々。



8. サヴィニーの胸像

担当職員の話では、ここ何年もサヴィニーの文庫を見たいと訪れた者はいないということであった。目録も、職員が以前に作成しようとしたが、こころざし半ばで病に倒れたという。何かしら涙の出る話であった。文庫の蔵書を見るためには標題を指定して、それが偶然にもサヴィニーのそれであったという幸運にすぎるといえない、という説明であった。

しかしながら、後日私はそれがいくぶん誤った認識であったと証明することができた。

というのは、私はある図書（H.P. Weber, Die Bibliothek des Juristen Friedrich Carl von Savigny, Bonn, 1971）に所蔵図書の一部が紹介してあることを知っており、またこれを幸運にも自由閲覧書庫から借り出すことができたからである。その成果の披露については、しかし、紙幅の関係で他の機会に譲ることを寛恕されたい。

むすびにかえて

私は図書館職員ではなく、一般の図書館の在りようを知っているわけではないが、ボン大学図書館がドイツの「標準」となる図書館だと言っておきたい。もちろん、この図書館もまた、現代の図書館が要請される電子化や開架比率の拡大、予算規模の圧縮、人員の合理化などという過大なまでの変革要求に晒されている。それに応えようとして、自分自身に無理をかけている部分も見受けられる。

とはいえ、学外者である私が突然どの職員

に質問しても簡潔な回答を得て、いっさいの不快感を味わうことがなかったことは予想外であり嬉しいことであった。ドイツ国内でもそのような対応を期待できない図書館は少なくない。おそらく、図書館が誰にでも開かれているということは、その職員が自らの職場を正しく認知しているということなのではないだろうか。また、このラインを眺める閲覧室のごとく図書館が図書を読む場所として快適であり、一日の大半を過ごしてなお離れがたい場所であることも特筆すべきである。

最後に、昼食抜きで私の案内を引き受けてくれ、質問に丁寧に応えていただいたバルコウさん他インフォの方々に記して感謝したい。

（おがわ・ともゆき）

ボン大学図書館ホームページ

<http://www.ulb.uni-bonn.de>

平成15年度東北大学附属図書館企画展

「明治・大正期の文人たち - 漱石をとりまく人々 - 」開催結果報告

会 期 : 平成15年10月31日(金)
 ~ 11月9日(日)
 入 場 者 : 864名
 講演会聴講者 : 129名

本館が所蔵する貴重資料として、「漱石文庫」の中からも『吾輩は猫である』や『道草』の原稿などを展示しました。

1. はじめに

附属図書館では、平成15年度企画展として、「明治・大正期の文人たち - 漱石をとりまく人々 - 」を開催しました。

平成11年度から昨年度までは、江戸時代を中心テーマに据え、歴史的イベントに関わる資料や文学・芸術作品などの資料を4回にわたり展示しました。今年度は江戸時代に続き、明治・大正時代を代表する小説家・思想家として夏目漱石を取り上げました。

夏目漱石に関する展示会は、各地の文学館・博物館でも頻りに開催されており、本館でも「漱石文庫」の資料から出品協力を行なっています。また本館でも、平成15年4月に新入生を主な対象とした特別企画展「夏目漱石」を実施し、本館が所蔵する漱石関連資料のごく一端を紹介しています。

本企画展「明治・大正期の文人たち - 漱石をとりまく人々 - 」はこれらの展示会を参照しつつ、特に夏目漱石および漱石と関わりの深い同時代の文人たち8人の、文学・芸術・生涯に焦点をあて、彼らの直接・間接の交流と、その文学・人生上での影響関係を探ることを主眼としました。

また、本企画展は、平成14年度にあらたに受け入れた漱石関連資料の中から、初公開資料も含む主要資料約20点を選定し、紹介することも目的の一つでした。

なお、仙台市博物館では10月31日～12月21日まで企画展「国宝『史記』から漱石原稿まで - 東北大学附属図書館の名品 - 」を開催し、



企画展ポスター

2. 展示会

(1) 第一部「漱石と子規」

第一部は「漱石と子規」と題し、漱石の生涯を辿りつつ、学生時代における漱石と正岡子規との出会いと交流、子規の影響により漱石が文学的な才能を開花させて行く過程を紹介することを主要なテーマとしました。特に、二人の文学的な交流を示す直接的な資料として、子規の文集『七草集』、漱石の漢詩紀行文『木屑録』(複製による展示)、「子規点漱石句稿」を展示しました。

さらに新収資料の中から、ロンドン留学中の漱石が、妻・鏡子にあてた書簡を9通展示しました。これらは、遠い異国に暮す漱石の、妻や子どもを切実に想う気持ちに溢れた書簡です。

「漱石文庫」には、漱石のロンドン留学中の消息を示す貴重な資料として、「渡航日記」,「滞

英日記」と呼ばれる2冊の日記と、「文学論ノート」と総称される「蠅の頭」ほどの文字で記された膨大なノート群が残されています。漱石の書簡は、これらの身近資料とともに、留学中の漱石の像をより鮮明に浮かび上がらせたことと思います。

(2) 第二部「漱石と同時代の文人たち」

第二部では、「漱石と同時代の文人たち」と題し、漱石と直接・間接に関わりのあった文人たちの中から特に狩野亨吉、中村不折、土井晩翠、ラファエル・フォン・ケーベル、魯迅の5人を取り上げ、漱石との交流、彼らの思想・文学・芸術などを紹介しました。

狩野、晩翠、ケーベルは、偶然にも本館でその蔵書を受け入れることになった人物たちであり、魯迅は、「藤野先生」でもよく知られているように、仙台医学専門学校（のちの東北大学医学部）で学んでおり、特に本学とも所縁の深い人物です。漱石と彼らの交流という視点によって、それぞれの人物たちの、あまり知られていない側面を明らかにすることを意図しました。

(3) 第三部「漱石と東北帝国大学」

第三部では、「漱石と東北帝国大学」と題し、漱石の門下生の中でも、主に小宮豊隆、阿部次郎を取り上げました。小宮、阿部は東北帝国大学法文学部創設期中核的なメンバーであり、漱石の門下生であるこの二人を中心として法文学部における教官たちが活発に交流しています。その意味では、漱石の影響は間接的ながらも東北帝国大学に及んでいたということもできます。

また新収資料の中から、芥川龍之介、安倍能成、森田草平ら、漱石の門下生たちの資料を展示しました。今回の企画展では展示できませんでしたが、新収資料の中には、門下生、知人、同時代の読者から届いた漱石あての書簡などが多数含まれています。これらの資料は同時代の

読者が漱石をどのように受容していたのかという観点からたいへん興味深い資料であると思われます。

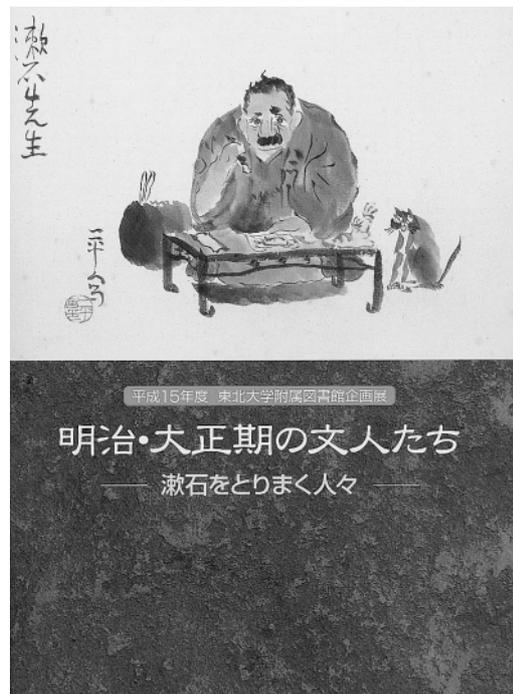


展示会場

(4) 展示会図録

今年度は、東北アジア研究センター・磯部彰教授の御援助により、従来にはない充実した図録を作成することができました。図録は、新収資料の紹介を中心に編集することとし、合わせて漱石の生涯が端的に分かるよう配慮しました。

幸いなことに、見学者からは好評をもって迎えられたようです。



展示会図録

3. 記念講演会

11月2日(日)には、本学文学研究科・佐藤伸宏教授を講師に迎え、「明治三十三年の漱石、子規、晩翠」と題する記念講演会を開催しました。講演会には、129名もの一般市民が聴講し、これまでにないほどの盛況ぶりでした。

佐藤教授は日本近代文学を専門とされており、本紙にも「『晩翠文庫』 - 書き入れを通して見た晩翠 - 」(vol.24, No.4)をご寄稿頂いています。三人の文学観や創作の動機にも触れられた講演内容には、佐藤教授の柔らかで分かり易い語り口とともに、多くの聴講者から大きな反響が寄せられ、講演後の質疑応答もたいへん活発に行なわれました。

なお講演記録は、次号以降の本紙に掲載する予定です。



記念講演会

4. 夏目漱石ライブラリ

本企画展の開催に合わせて、「漱石文庫」および夏目漱石に関する情報を提供することを目的に、インターネット上に「夏目漱石ライブラリ」を公開しました。本サイトから漱石文庫目録データベースの検索、自筆資料の画像閲覧などを行うことができます。今後、継続してコンテンツを拡充して行く予定です。

(<http://www.library.tohoku.ac.jp/collect/soseki/>)



漱石文庫目録データベース

5. おわりに

展示会中、見学者の方々から多くの反響、質問が寄せられ、「国民作家」夏目漱石への変わらない関心の高さを伺い知ることができました。

「夏目漱石」という近代日本における巨大な人物は無尽蔵の鉱脈だとも言え、一回の展示会のみでは到底語り尽すことはできないでしょう。本展示会においても、漱石の人物像と、彼の作品の持つ魅力のごく一端に触れ得たに過ぎません。

最後に、本企画展の開催にあたりご協力・ご指導頂いた方々に感謝申し上げますとともに、今後とも更なるご支援をお願い申し上げる次第です。

(企画展WG)

平成15年度東北大学附属図書館職員総合研修会

東北大学附属図書館職員総合研修会は、本学図書館職員及び近在の他大学等図書館職員を対象に、業務に必要な知識の研鑽を行い、資質の向上を図ることを目的としており、平成15年度は下記の日程と内容で学内外より約60名が参加して開催されました。

日時：平成15年11月20日（木）

13：25～16：45

会場：東北大学附属図書館2号館会議室

講演：『図書館専門職員育成のための要件』

村橋 勝子 氏

（日本経済団体連合会 社会本部
情報メディアグループ長）

『仕事革命講座：図で考える人は仕事
ができる』

久恒 啓一 氏

（宮城大学事業構想学部教授）



（総合研修会 村橋氏）



（総合研修会 久恒氏）

村橋氏の講演では、図書館の概念や要件等について最初にふれられ、日本経済団体連合会図書館の具体的な活動内容について紹介していただきました。その図書館の環境や利用者に応じたポリシーを設定し、きめ細かな業務分析と改善を行う等サービス内容の充実に努められている姿勢には感心させられました。

また、職員の育成のための職場環境に関しては、他の組織との人事交流を図る各職員に目標を設定させてモチベーションを高める

その成果・内容に対するの適正評価を行う等の要件の一例が提示され、それらに対する取り組みをお話いただきました。図書館の専門職員育成のあり方を考えるうえで、大変有意義な内容でした。

次に、久恒氏の講演では、図で示した方が他者にもその内容が伝わり易い点や、箇条書きで内容を書く場合よりも自分自身で深く考えるようになるなどの優れた面について、豊富な事例により分かり易くご説明いただきました。文書で物事を整理する従来のやり方を改め、図に置き換えて表現することの重要性を認識させられ、とても参考になりました。

この講演には、図書館の職員だけでなく、他の部局からも参加があり、講演内容に対する関心の高さがうかがえました。プレゼンテーション能力は、今後ますます職員に求められる能力の1つとなると思います。慣れ親しんだ方法から脱却するのは容易ではありませんが、図で表現することの優れた点を認め、少しずつ取り入れていく必要があると感じました。

最後に、村橋様、久恒様、そしてご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

平成15年度総合研修委員：小松武彦，
内ヶ崎洋一，南館義孝，菅原 透，高橋菜穂子

（総合研修委員会）

会 議

学 内

15.10.2 第4回分館長会議

・協議事項

1. 平成15年度第2回商議会について
2. 学術情報整備計画(2004年)について

・報告事項

1. 学術情報整備検討委員会並びに学術情報資料選定小委員会の報告について
2. 学生用図書整備検討委員会について
3. その他
 - 1) 平成15年度企画展について
 - 2) 学閲図書へのバーコード貼付作業について

15.10.8 第2回商議会

・協議事項

1. 学術情報整備計画(2004年)について
2. 2年次ゼミ学生の書庫入庫について
3. 「東北大学附属図書館貴重図書等指定基準」の改正について

・報告事項

1. 中期目標・中期計画について
2. 学術情報整備検討委員会並びに学術情報資料選定小委員会の報告について
3. 学生用図書整備検討委員会について
4. 貴重図書選定委員会について
5. 放送大学宮城学習センターの学生の東北大学附属図書館利用に関する申し合わせについて
6. 各分館からの報告について
7. その他
 - 1) 平成15年度企画展について
 - 2) 学閲図書へのバーコード貼付作業について

15.11.13 第5回分館長会議

・協議事項

1. 学術情報整備計画について
2. 図書館利用規則等の見直しについて

・報告事項

1. 最近の図書館行政の課題について(文部科学省情報課連絡事項)
2. 学生用図書整備検討委員会の報告について

て

3. 承継図書資産DB化の進捗状況について
4. その他

- 1) 文献画像伝送システムに関するメーカーとの打合せについて
- 2) 平成15年度企画展について

15.12.18 第6回分館長会議

・協議事項

1. 平成15年度第3回商議会について
2. 附属図書館本館利用規則及び利用細則の改正について
3. 図書館中期目標・中期計画の見直し及び達成度評価資料について
4. 図書館中期目標・中期計画における平成16年度計画について

・報告事項

1. 学術情報整備検討委員会及び学術情報資料選定小委員会について
2. 学生用図書整備検討委員会について
3. 東北大学評価データベースへの追加入力項目(図書館)について
4. 平成15年度及び16年度以降の図書購入について
5. 「図書館を利用した全学教育科目」の開講について
6. 図書資産データ入力作業の進捗状況について

15.12.25 第3回商議会

・協議事項

1. 附属図書館本館利用規則及び利用細則の改正について
2. 図書館中期目標・中期計画の見直し及び達成度評価資料について
3. 図書館中期目標・中期計画における平成16年度計画について
4. 学術情報整備計画(2004)について
5. 齋藤養之助家史料受入・整理委員会の設置について

・報告事項

1. 学術情報整備検討委員会及び学術情報資料選定小委員会について

- | | |
|--|---|
| <p>2. 学生用図書整備検討委員会について</p> <p>3. 東北大学評価データベースへの追加入力項目（図書館）について</p> <p>4. 平成15年度及び16年度以降の図書購入について</p> <p>5. 「図書館を利用した全学教育科目」の開講について</p> | <p>6. 齋藤養之助家史料の寄贈受入について</p> <p>7. 各分館からの報告</p> <p>8. その他</p> <p>1) 平成15年度企画展について</p> <p>2) SPARC/JAPAN について</p> <p>3) 財布の置き引きについて</p> |
|--|---|

人 事 異 動

平成16年 1月 1日現在

発令年月日	新 官 職	氏 名	旧 官 職	備 考
15.11.30		飯 沼 一 宇	医学分館長	任期満了
15.12. 1	医学分館長	佐 藤 洋		併 任
16. 1. 1	山形大学附属図書館事務部長	清 水 二 郎	総務課長	転 出
"	総務課長	諏訪田 義 美	情報管理課長	配置換
"	情報管理課長	佐 藤 正 弘	茨城大学附属図書館情報管理課長	"

編 集 後 記

地震や冷害、ベガルタJ2降格など、宮城県には暗い話題が多かった2003年ももうすぐ終わりです。来年はいよいよ国立大学が法人化されます。それにとまなう様々な作業も大詰めというところでしょうか。

そんな中で開催された企画展「明治・大正期の文人たち - 漱石をとりまく人々 - 」では、本学構成員だけでなく一般の方も多数来場されました。

平行して仙台市博物館でも本学図書館の所蔵

資料をテーマにした企画展が開催されていまして、足を伸ばされた方が多かったようです。大学図書館の地域貢献が叫ばれる昨今、その期待と責任の大きさを感しました。

本学構成員へのサービスの質をこれまで以上に向上させつつ、一般の方へのサービスを拡大するのは難しい課題の一つです。法人化に向けて、身の回りのことだけでなく利用者へのサービス第一に考えていかなければならないとあらためて感じました。(F)

東北大学附属図書館報「木這子」 第28巻第3号（通巻104号）発行日 平成15年12月31日

発 行 人 坂上 光明 広報委員長 清水 二郎

発 行 所 東北大学附属図書館 〒980-8576 仙台市青葉区川内 電話 022-217-5911, FAX
022-217-5909

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

 古紙配合率100%再生紙を使用しています